

小児看護 10

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

Vol.46 No.10 OCTOBER

2023

新生児看護の教育

看護職の
専門性を高める



連載

もっと知ろう！障害がある
子どもと家族のくらしの支え方

重症心身障害児とその家族を対象とした研究のあり方

へるす出版

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第28回 図と地の転換

心理学において、私たちが全体を知覚する時には「図と地」を分離しているといわれている。ゲシュタルト療法と呼ばれる心理療法にも、この「図と地」の概念が応用されている。患者さんが注意を向けている部分を「図」とし、注意を向けていない背景を「地」とするが、注意を向けていない「地」の部分にこそ患者さんの潜在的な成長の可能性や回復能力があると考える。すなわち、「図と地」を転換することで、適応的な認知や行動を取り戻していく療法である。

NPO 法人エゴノキクラブでは、「音読クラブ」というクラブ活動を行っている。ここでは、小児がんの治療を受けた子どもたちが、国語の教科書やお気に入りの1冊をボランティアに読んで聞かせる。そして、ボランティアの人たちが、子どもたちに質問したり、教えを乞うたりする。

実は、このクラブ活動は私のある経験から生まれている。10年以上も昔、病棟に絵本の読み聞かせボランティアが来ていた。ボランティアの女性は夫の海外赴任についていき、「発展途上国でもボランティア活動をしてきた」と誇らしく語っており、小児がんの子どもたちに絵本を読み聞かせることをとても楽しみにしていた。しかし、私は内心、危機感を抱いていた。

一般的に、ボランティア活動は、意欲よりも自制心がかつとも強く要求される。なぜなら、相手より優位に立ちやすい環境におかれるため、自己陶醉が生まれ

やすいからである。平たくいうと、「ボランティアをしてあげている私」を生じさせるために、小児がんをはじめとするマイノリティの人たちが踏み台にされやすい。その構造に注意を払えないと、ボランティアはなかなか難しい。意欲がありすぎると、なおさら目は曇る。

案の定、その女性ボランティアは、プレイルームに来るなり、三々五々、遊んでいた子どもたちの遊びを止めさせ、ビデオも消してしまい、半ば強制的に絵本を読み聞かせた。ご存じの通り、プレイルームに来る子どもたちは、つらい治療の間であったり、ようやく病室から出られた瞬間であったりしたのに、ボランティアに付き合わされたのだ。

そういう苦い体験から、音読クラブは子どもたちが大人に読み聞かせる形を取っている。つまり、最初から子どもが優位に立つ構造にしてある。子どもたちは大きな声でしっかりと本を読んでくれるだけでなく、大人がどんな質問をしてもにこにこして答えてくれる。大人たちは、子どもに「ありがとう」と礼を尽くすことになる。子どもが大人の役に立つ。まさに、「図と地の転換」をしたのだ。

病気だから、マイノリティだから、活躍できないのではない。彼らに活躍してもらおう構造を用意できるかどうか。関心があれば、あなたもぜひエゴノキクラブをのぞいてみてほしい。

佐藤聡美
さとみ・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO 法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国の Bellevue Community College を卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞（日本小児血液・がん学会賞）受賞。